

2025. 3月卒業時アンケート結果

総合政策学部

属性

Q1

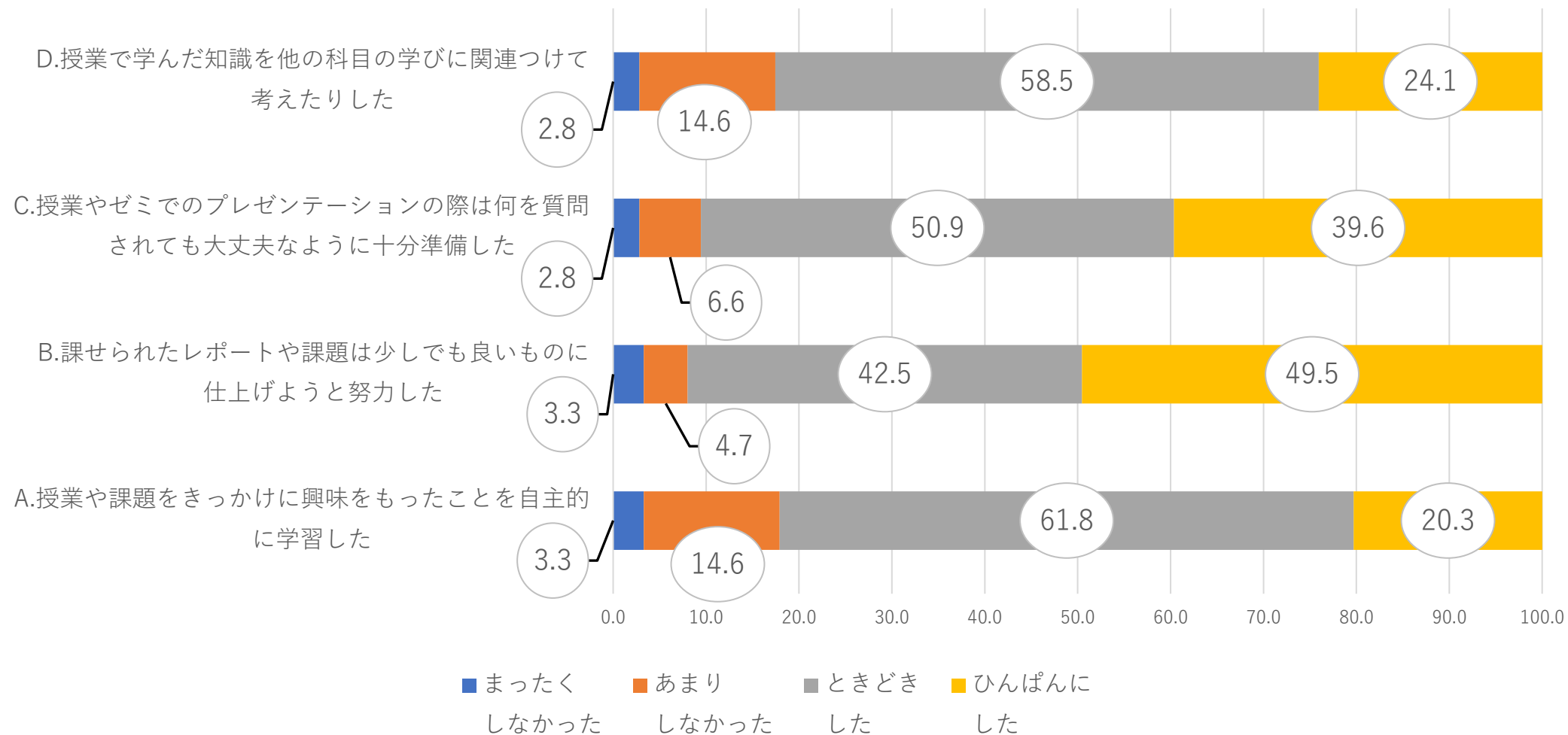
	n	%
男	122	57.5
女	90	42.5
合計	212	100.0

Q2

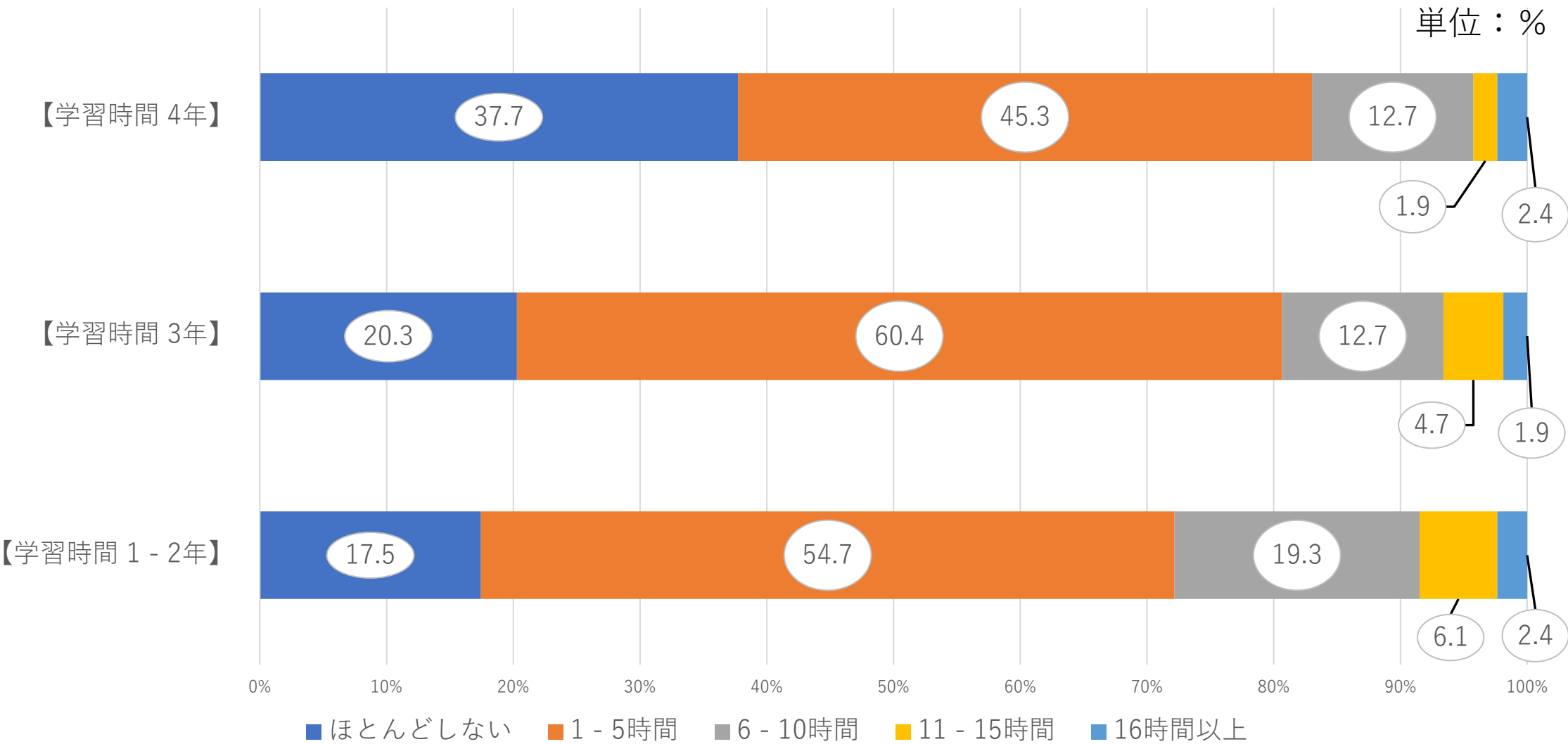
	n	%
総合政策学科	149	70.3
企業経営学科	63	29.7
合計	212	100.0

Q 3.あなたは大学の授業や課題などの学習に関して、次のようなことをどのくらい取組みましたか。
(A～D)

単位：％

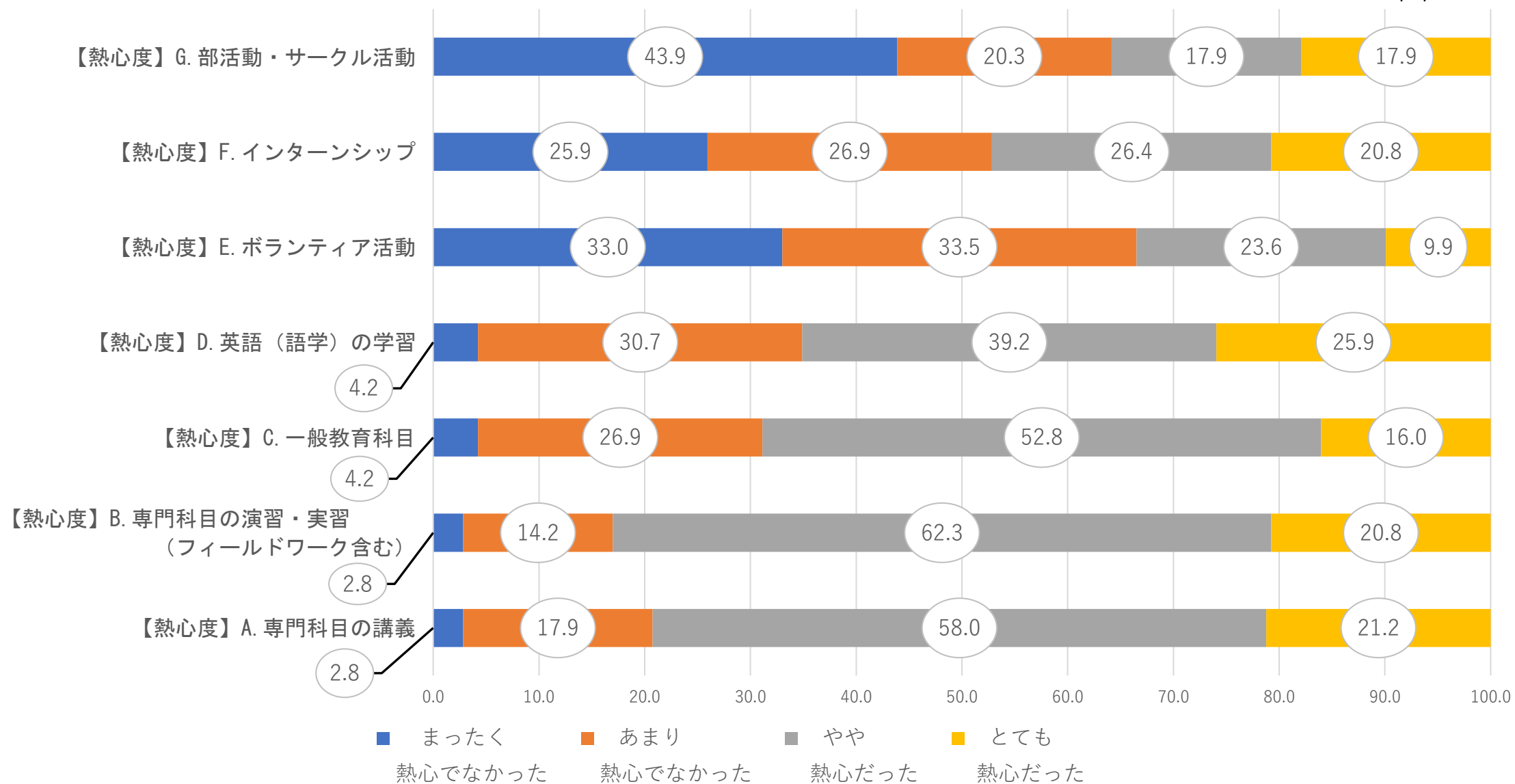


Q4.あなたは大学の授業への出席以外に、一週間あたり平均して何時間ほど「自学自習（予習・復習・課題など授業やゼミに関する学習）」をしましたか。

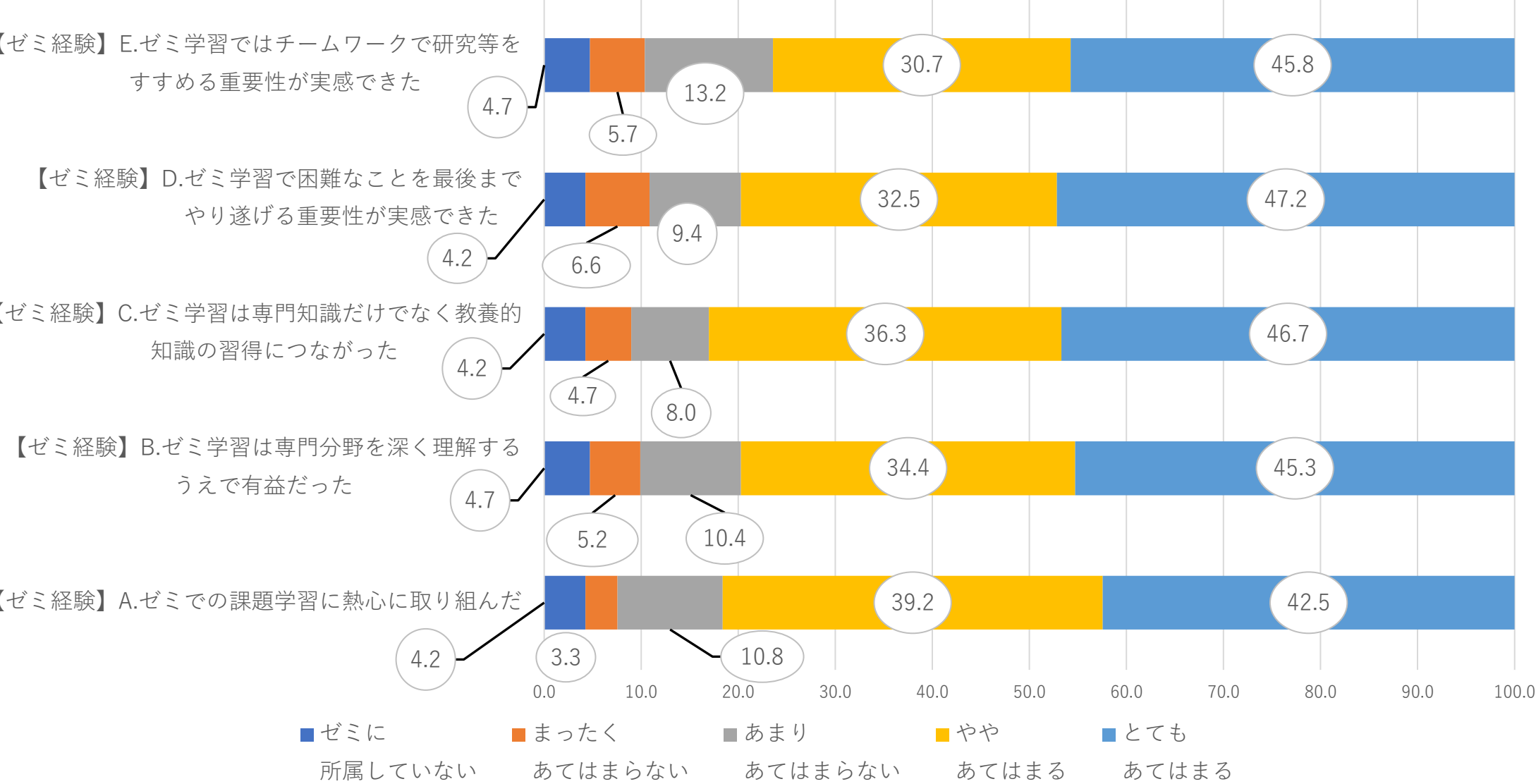


Q5. あなたは在学中に、次の活動にどの程度熱心に取り組みましたか。（A～G）

単位：％

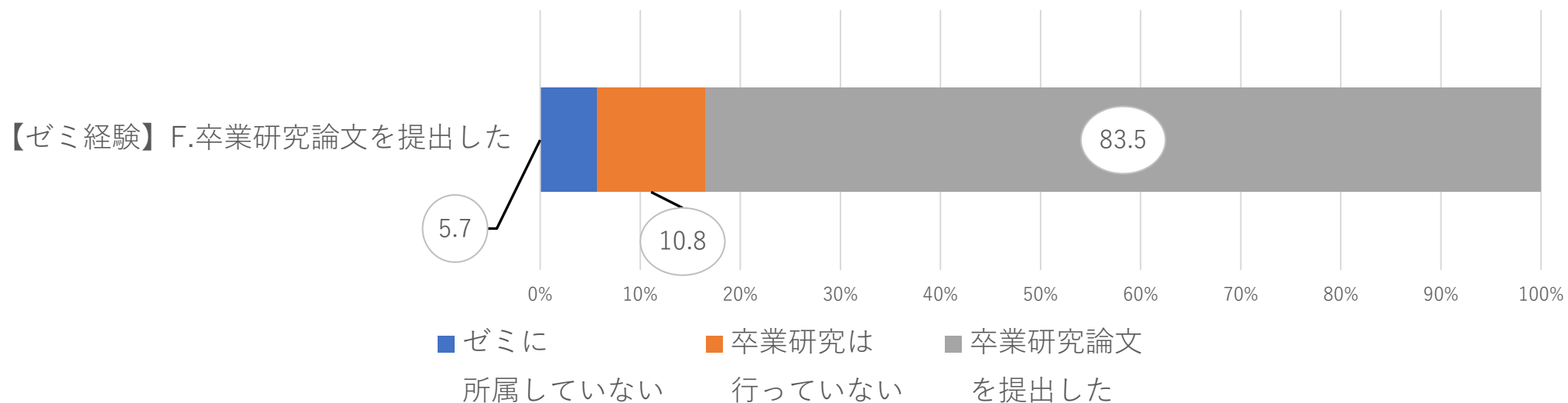


Q6. ゼミでの学習を振り返って、次のことがらはどれくらいあてはまりますか。(A～F) ※Fは次ページ
単位：％



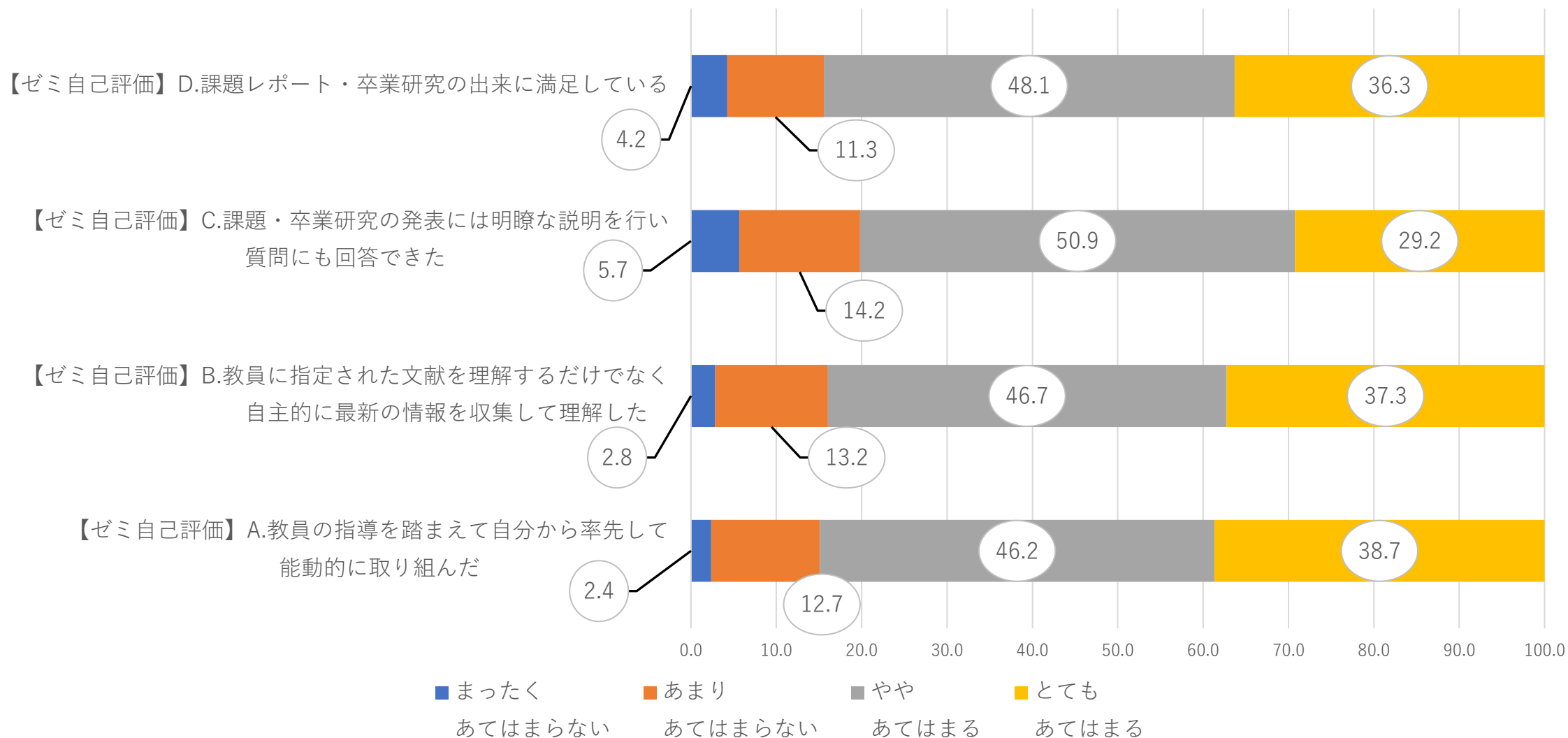
Q6. ゼミでの学習を振り返って、次のことからはどれくらいあてはまりますか。(F)

単位：％



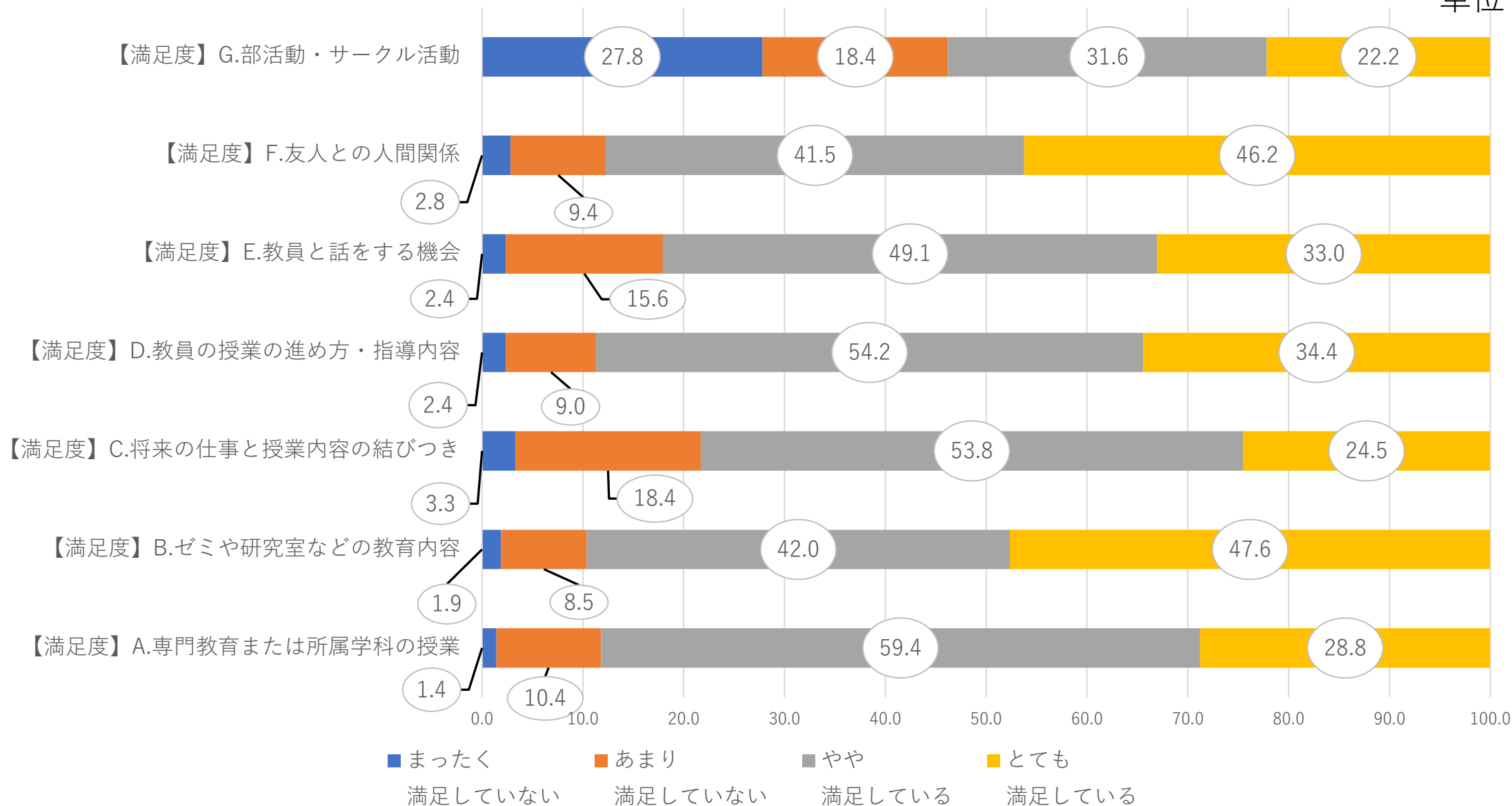
Q7. ゼミでの学習や卒業研究の実施内容・評価について、あなたの経験の評価するといずれにあてはまりますか。(A～D)

単位：％



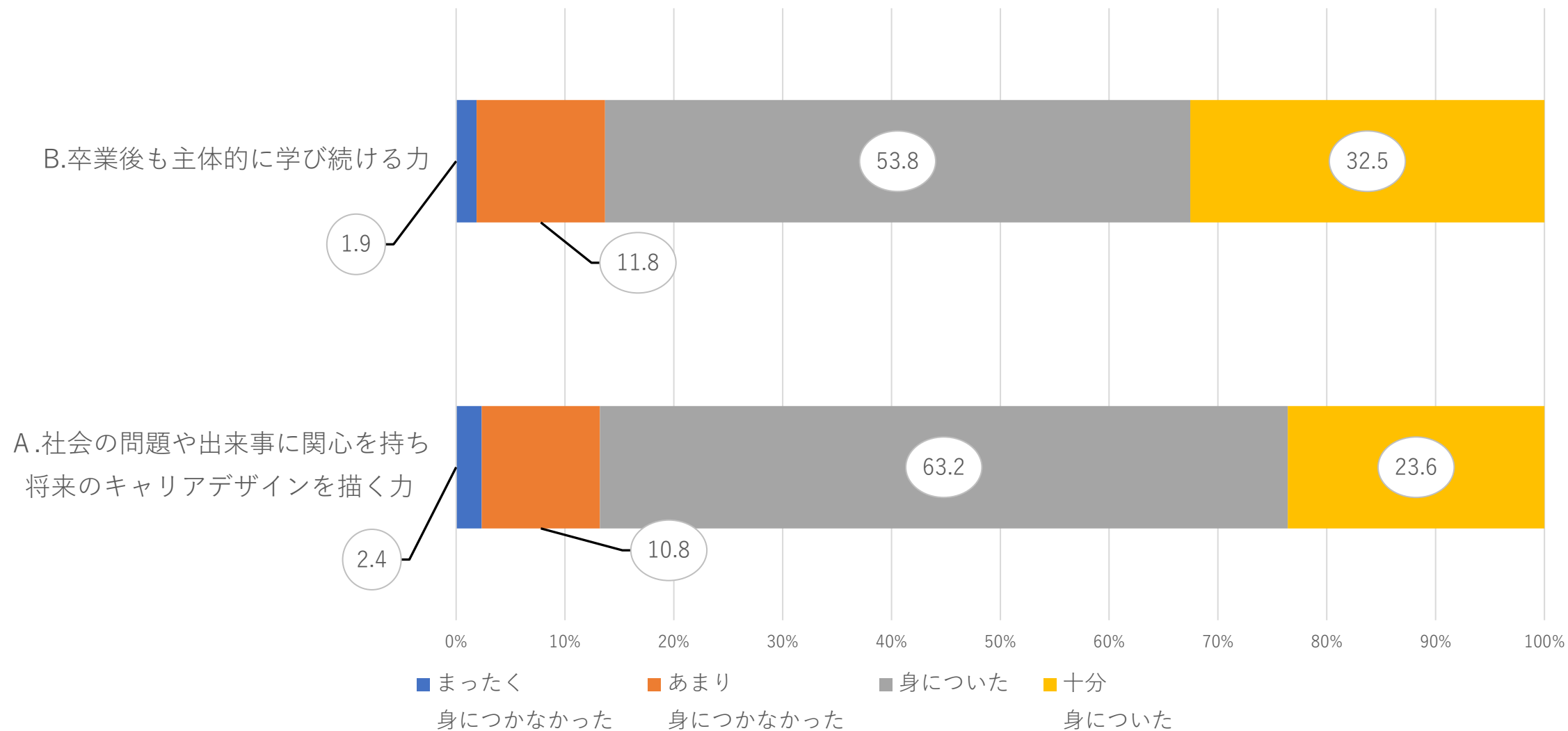
Q8. あなたは大学で教育内容や学生生活にどの程度満足していますか。(A～H)

単位：％

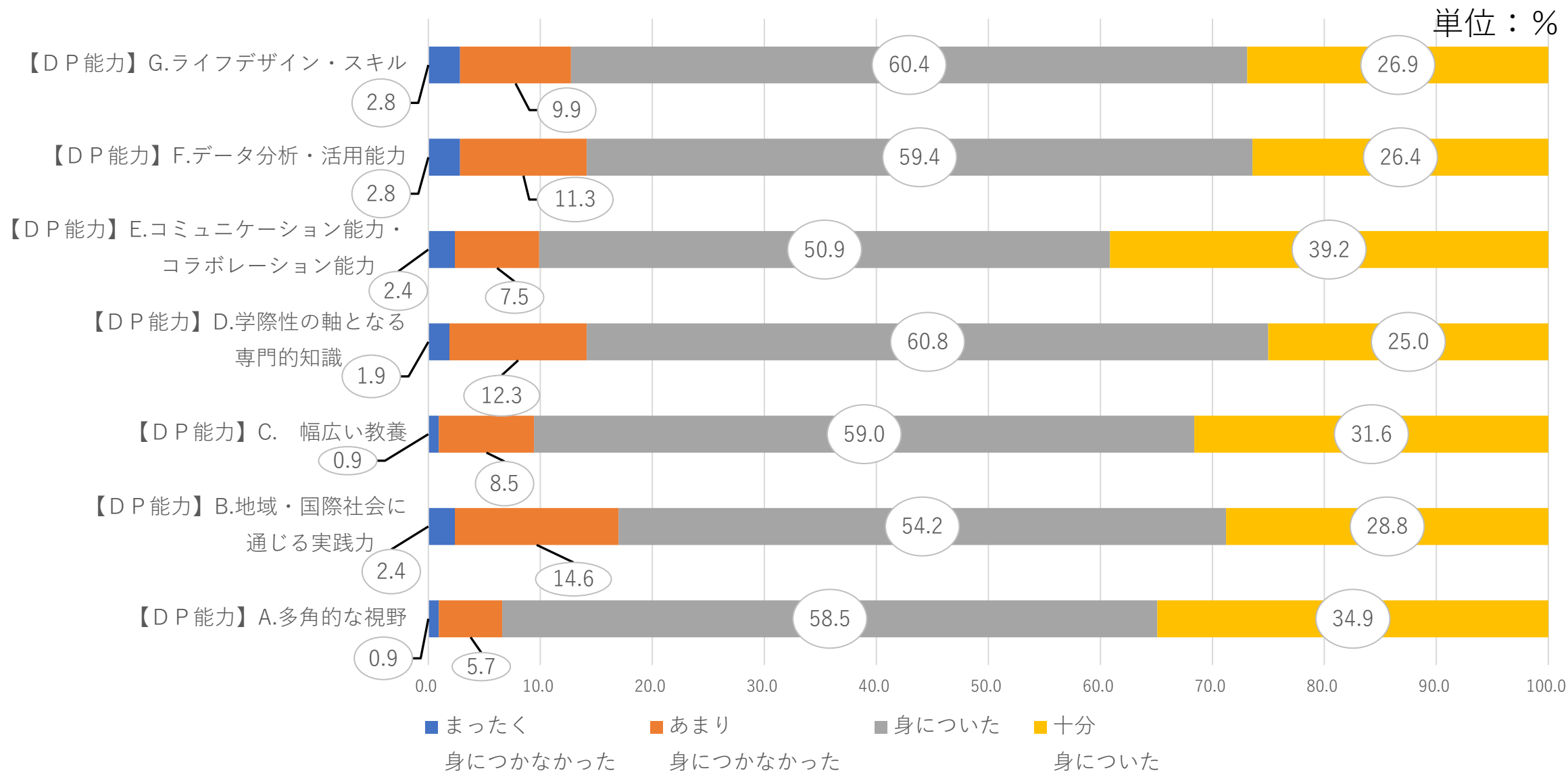


Q9. あなたは在学中に、次の力をどの程度身に付けたとおもいますか。（A～B）

単位：％



Q10. 総合政策学部が定めるディプロマ・ポリシー能力（DP能力）をどの程度身につけましたか。（A～G）



総評：総合政策学部

本年度の卒業生は、2022年度カリキュラム導入期に学んだ世代であり、コロナ禍後の教育環境が定着した中で大学生活を送った学年である。卒業生アンケートの結果からは、「主体的な学びの定着」と「データ活用能力の向上」が大きな特徴として読み取れる。一方で、「英語学習への意欲」と「授業外学習時間」には依然として課題が見られ、学部教育の成果と今後の改善点が明確に示された。

まず、主体的・自律的な学習行動については良好な結果がみられた。「授業や課題をきっかけに興味をもったことを自主的に学習した」は82.1%（前年度71.8%【以下、（ ）内は前年度】）「課せられたレポートや課題をより良いものに仕上げようと努力した」は92.0%（95.5%）、「プレゼンテーションのために十分な準備をした」は90.6%（91.4%）となっており、多くの学生が受動的な学習にとどまらず、自ら課題に取り組む姿勢を身につけていることがうかがえる。また、授業で学んだ知識を他の科目と関連づけて考える学生も82.5%（80.4%）に達しており、学習内容を横断的・総合的に捉える力が育成されていると評価できる。

ゼミ教育についても高い評価が得られた。「ゼミ学習は専門分野を深く理解するうえで有益だった」は79.7%（89.1%）、「教養的知識の習得につながった」は83.0%（90%）、「困難な課題を最後までやり遂げる重要性を実感できた」は79.7%（87.7%）、「チームワークの重要性を実感できた」は76.4%（85.4%）となっている。また、83.5%が卒業研究論文を提出しており、81.1%（85.5%）が教員の指導を踏まえて主体的に研究へ取り組んだと回答している。これらの結果から、ゼミ活動が専門知識の深化に加え、課題解決力や協働力を育む教育の中核として機能していることが確認できる。

学生生活への満足度も総じて高い水準にある。友人との人間関係への満足度は87.7%（90%）、ゼミや研究室などの教育内容への満足度は89.6%（91.4%）、専門教育への満足度は88.2%（90.5%）であった。教員の授業運営や指導内容への満足度も88.7%（89.5%）に達しており、教育環境に対する評価は概ね良好であるといえる。こうした結果は、本学部における教職員と学生との関係性や学修環境が安定して機能していることを示している。

一方で、学習意欲の内容には特徴的な傾向がみられる。専門講義や専門演習への熱心度はそれぞれ79.2%（81.2%）、83.0%（82.8%）と高い水準を維持しているが、英語学習への熱心度は65.1%（75.9%）にとどまった。国際化やグローバル人材育成が求められる社会環境を踏まえると、語学学習への動機づけや学修機会の充実が今後の課題である。また、自学自習時間については、「ほとんどしない」と「1～5時間」を合わせると1・2年次で72.2%（77.3%）、3年次で80.7%（79.5%）、4年次では83.0%（86.8%）を占めており、授業外学習の時間確保は依然として十分とはいえない。主体的学習への意識は高いものの、継続的な学習習慣の形成にはさらなる支援が必要である。引き続きプレゼミナールにおける初年次教育を強化し、学びの継続を促す取り組みに努めたい。

ディプロマ・ポリシーに定める能力の獲得状況では、「多角的な視野」が93.4%（93.2%）、「コミュニケーション・コラボレーション能力」が90.1%（90.4%）、「ライフデザイン・スキル」が87.3%（87.7%）と高い達成度を示した。特に注目されるのは、「データ分析・活用能力」が85.8%（78.2%）に達している点である。総合政策学部の特徴であるデータサイエンス教育や情報教育の成果が一定程度表れているものと考えられ、実践的なデータ活用力の育成は本年度卒業生の特徴の一つとして評価できる。また、「地域・国際社会に通じる実践力」も83.0%（81.8%）となっており、社会課題への関心や実践的な視点の養成についても成果が認められる。

以上のことから、2025年度卒業生は、ゼミ活動を中心とした主体的な学びを通じて、多角的な視野や協働力、データ活用能力を身につけた学年であったと総括できる。一方で、英語学習への意欲向上や授業外学習時間の確保については継続的な課題として残されている。今後は、低年次からの学習習慣形成支援と国際的視野を育む教育の充実を通して、主体的学修のさらなる発展につなげていくことが求められる。